

ノンフィクション

を読む

平成二十八年度版教科書では、同時代に生きる人間の姿を取り上げたノンフィクション教材の系列（読書・十二月）を位置づけています。

今号では、インタビューや実践提案などを通して、ノンフィクションを読む視点や授業の工夫について考えます。

インタビュー

心を揺るぶる事実と出会う

文筆家 川端裕人

ノンフィクションの魅力とは、いったいどこにあるのでしょうか。
小説を執筆する一方で、ノンフィクションの作品も多く手がけてこられた文筆家の川端裕人さんに、お話を聞きました。

「地図」を作りたい

——川端さんは、ノンフィクションというジャンルをどのように捉えていらっしゃるのでしょうか。

普通に「ノンフィクション」といって僕が思い起こすのは、「事実に基づきながら、最初から最後まで筋道を立てて書き切る」というもの。書き手はそうして事実と整合した「物語」を作るんです。でも、そういう背骨の入ったノンフィクションを、僕はまだ書いていない気がします。

さまざまな事実を自分なりの切り取り方で提示しつつ再構成していくのが、王道的な物語アプローチとするならば、僕は、いくつかの断面を同時に見せる「地図」を作りたい。そんな欲望があるんです。ここにはこんな事実が、あそこにはこんな事実があるという地図を作る。これもまたノンフィクションの一つの形だと、僕は思っています。

——具体的な作品では、どんなものがありますか。

例えば、僕の作品では『動物園にできること』（文春文庫）や『緑のマンハッタン』（文藝春秋）は、全体として大きな流れは作っているけれど、ある意味、エピソードの羅



撮影：鈴木俊介

自分がおもしろいと思ったところを おもしろがって読むのが一番。



列できているといってもいい。はっきりとした物語を完結して提示するのではなく、個々のエピソードを提示することで、そのテーマの中での地図を作っているんです。こういう手法はわりと珍しいと思いますよ。

——地図を作るといふことにこだわりのもつていらっしゃるのでしょうか。

こだわりというより、メンタリティー、つまり考え方の問題なんでしょうね。「私の話を聞け！」というのではなく、自分が書きたくて書いているだけですから。

僕の場合、題材や取材対象は、日常の中で興味を引かれる物事から広がっていくことがほとんどです。おもしろいと思っ

ていくうちに、事実と事実がつながって、網の目みたいになっていく。そうすると、「おもしろいから読んでみて！」と言いたくなってくる。その網目のつながり方を描いたら、それが地図になるんです。

——読者には、ノンフィクションのどんな

ところに着目して読んでももらいたいと思われ

れますか。

それはもう、読者自身がおもしろいと思ったところをおもしろがって読んでもらうことが一番。僕は、そういうノンフィクションしか書いてきませんでしたからね。書き手がさらっと書いたところ、思いも寄らないようなところに反応してくれる人もいます。それによって、こちらが気づかされることもあるんです。

教科書教材について 思うこと

——教科書に掲載されている三つのノンフィクション教材については、どんな感想をおもちになったのでしょうか。

「桜守三代」（二年）は、「三代にわたって桜守を務める」という一つのストーリーを軸にした作品。これは、僕が考えるノンフィ

レは、「ジャーナリズム」という言葉が非常に似合う作品ですね。おそらく一般の人がノンフィクションとしてイメージするものにいちばん近いのが、こういう文章なのではないでしょうか。写真があることで、何より、「本当にあったことなんだ」という現実感が伝わってきます。

こういったものを中学生が読むと、自分の住む環境とのあまりの違いに、すごい衝撃を受けたり、愕然（がくぜん）としたりする。ですから、そこには何か一つでいいから「希望」があつてほしいと思います。この教材のうちに。そうでなければ、ショックを受けたまま終わってしまい、新たな関心につな

書かれていますか 嘘はない

——ノンフィクションの魅力とは、何でしょうか。

それはシンプルで、「事実を土台として書かれているという保証があること」だと、僕は考えています。事実を、物語として構成するのがノンフィクション。何を軸とするかは筆者の主張によって違ってきますが、「書かれていることに、基本的には嘘はな

クシヨンの王道に近いといえます。読者はきつと、三代にわたって受け継がれる思いに焦点を当てて読んでいくことでしょうね。ただ、取り上げた人たちの考え方や行動に寄り添いつつも、筆者はそこに何かしら自分の主張を滑り込ませているはず。少なくとも「語ること」と「語らないこと」の選択というレベルにおいてはそれが表れているはず。そういうことを考えながら読んでもおもしろいかもしれません。

——「小さな町のラジオ発」（二年）はいかがでしょうか。

ノンフィクションには、調べたことをもとにして書くタイプの他に、自分が体験したことをもとにして書くタイプもあると思います。この文章は後者ですね。特別な体験をした人だけが書けるものだといえると思います。筆者がしたことやその主張が、ばりばりと表に出ている。

大きな災害があつたとき、簡易的な設備

い」と保証された文章であることは確かです。そこは信用して読んでいい。そのうえで疑問が浮かんでしまうような作品もありますが、それでも、筆者は事実性を保証しようとしている。そのあたりが、小説などのフィクションとは違うところです。

「事実が小説より奇なり」とはよくいいますが、事実が小説よりもインパクトが大きいのはよくあることです。実際にあつたこととして読むからこそ、強烈な衝撃を受けたり、自分の考えを揺さぶられるような思いにさせられたりするのかもしれない。そこがノンフィクションの一番の魅力じゃないか。僕はそんなふうに思います。



かわばた・ひろと

1964年兵庫県生まれ、千葉県育ち。文筆家。東京大学を卒業後、テレビ局勤務を経て独立。著書に『青い海の宇宙港（春夏篇・秋冬篇）』（早川書房）、『リョウ&ナオ』（光村図書出版）など小説の他、『PTA 再活用論』（中公新書ラクレ）、『宇宙の始まり、そして終わり』（日本経済新聞出版社）など多数のノンフィクションがある。「夜間飛行」ウェブサイトにて、メルマガ「秘密基地からハッシン!」を毎月発行中。